Z317a　明和６年の彗星の記録について

藤原康徳（日本流星研究会）、岩橋清美（國學院大學・国文学研究資料館）

1769 年 8 月 8 日（グレゴリオ暦）にフランスのメシエ（Charles Messier）が小望遠鏡（焦点距離：2 フィート）を使って発見した彗星は、太陽と地球に接近して 8 月中旬には肉眼で見えるようになった（Kronk　1999）。日本国内にも多くの記録が残っている（大崎正次　1994）。我々は、今回、これらの記録の中からこの彗星を図にして記録されている史料を調査した。主として次の 3 点を紹介する。秀尹「星解」（松阪市蔵）、三歳図説竝寛宝以来実測図説（東北大学狩野文庫）と明和六年己丑彗星図説（日本学士院）である。「星解」には、当時の陰陽頭であった土御門泰邦や暦博士の幸徳井保高の勘申とともに土御門考図と幸徳井家考図と称する彗星のスケッチ図がそれぞれ 1 枚掲載されている。三歳図説竝寛宝以来実測図説では、7 月 23 日から 8 月 15 日までの 11 日分の宿度と去極度で表した彗星の位置の記録とともに背景となる星（星座）を記入した 1 枚の図にその位置と尾の様子（長さ）がまとめて記入されている。明和六年己丑彗星図説では、7 月 28 日から 8 月 14 日までの 6 日分の彗星の位置と尾の形状が、それぞれの日ごとに二十八宿距星の宿度線と赤道線が記入されている 1 枚の一種の部分的な星図に記録されている。これらの図付きの記録の性格や精度、及び 3 者の比較した結果について報告する。